

“小さな願い”を叶える意思決定支援

当院では、人生の最終段階における医療・ケアの提供において、多職種から構成される医療・ケアチームで患者等に対し適切な説明と話し合いを行い、患者本人の意思決定を尊重した医療・ケアを提供しています。今回は急性期病棟(3階病棟)でのエピソードを紹介させていただきます。

Episode：ミカン畑を目に焼きつけて ～人生の景色を守る医療のかたち～

「9月にミカンがとれる。見にいかなばいかん」

重篤な疾患を抱える高齢の男性患者A氏が、繰り返し口にしていた言葉でした。それは治療への希望というより、自身の人生を最後まで自分らしく生きたいという静かな意思表示でした。家族と共に守ってきたミカン畑を、もう一度この目で見ておきたい。その思いが、A氏とご家族の選択の軸となっていました。慢性腎不全や糖尿病、膀胱癌によるストーマ造設など複数の既往を抱える中、尿管腫瘍の進展による十二指腸閉塞が判明しました。主治医から治療方針が提示されましたが、A氏とご家族は、これまでの話し合いを踏まえ、延命を目的とした積極的治療ではなく、自然経過と緩和的対応を選択しました。その後、誤嚥性肺炎を発症しHCUで人工呼吸管理を要する事態となりましたが、

「自宅へ帰る」という意思是最後まで揺らぐことはありませんでした。人工呼吸器離脱後、状態が不安定な中でも在宅移行を見据え、看護師長の判断で緊急の多職種カンファレンスが開催されました。病棟医師、看護師、MSW、皮膚・排泄ケア特定認定看護師、特定ケア看護師、かかりつけ医、訪問看護師が一堂に会し、短期間で在宅看取りに必要な医療・介護体制を整えていきました。急性期病院から在宅へ、命をつなぐための連携が一気に動き出した瞬間でした。

退院前日、妻が病室へ持参したのは、A氏が丹精込めて育ててきたミカンでした。受け持ち看護師は、そのミカンを丁寧に搾り、ほんの一滴の果汁をA氏の唇へ運びました。乾いていた口元に広がる香りと味に、A氏の表情は明らかに和らぎました。それは単なるケアではなく、「帰れる」という確信が、A氏と医療者の間で静かに共有された瞬間でした。

ミカンはA氏にとって、ただの果物ではなく生きてきた証そのものです



「見にいかなばいかん」と願っていたミカン畑を、妻と長男とともに眺めた帰宅の道

翌日、A氏は自宅へ戻りました。息子の運転する車を先頭に、介護タクシーで病院を後にし、山を一周するように遠回りしながらミカン畑を眺めて帰宅しました。言葉少なでしたが、その視線は確かに、自らが生きてきた風景を追っていました。帰宅後は妻と穏やかな時間を過ごし、数日後、かかりつけ医と訪問看護師、ご家族に見守られながら静かに旅立たれました――。

本症例は、急性期医療においても、患者が大切に生きてきた人生の風景や価値観を尊重し、多職種と地域が連携することで、その人らしい最期を支えられることを示しています。治す医療から、支え、つなぐ医療へ。私たち医療者に、その本質を改めて問いかける事例となりました。